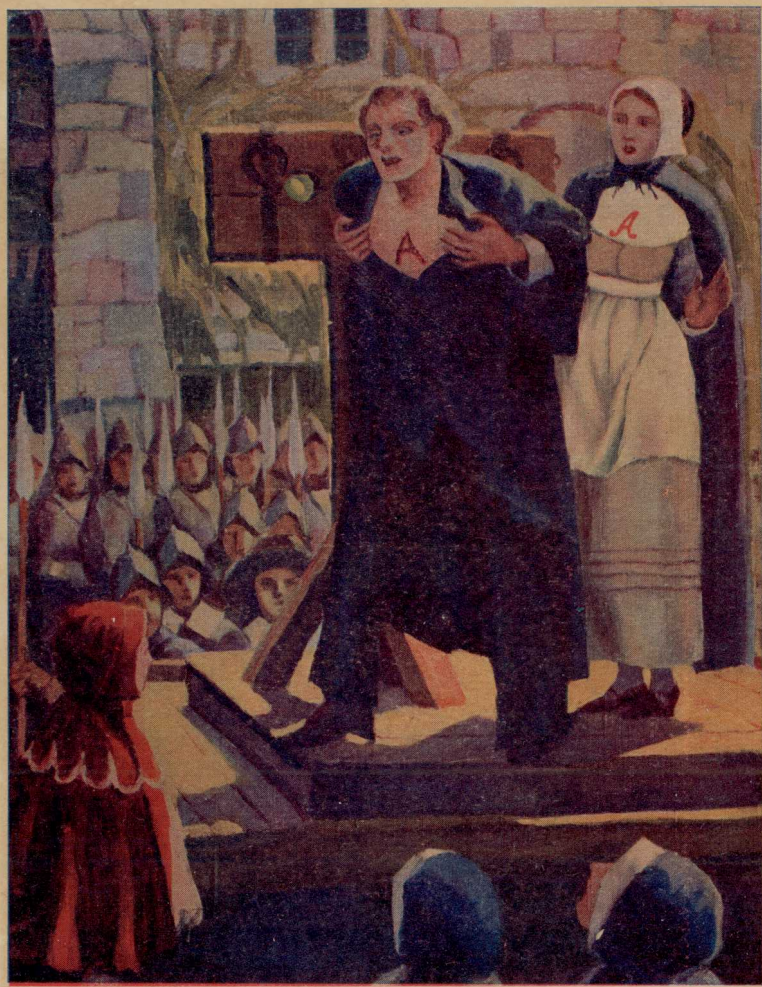




PROSE TALES

By E.A. Poe

THE SCARLET LETTER

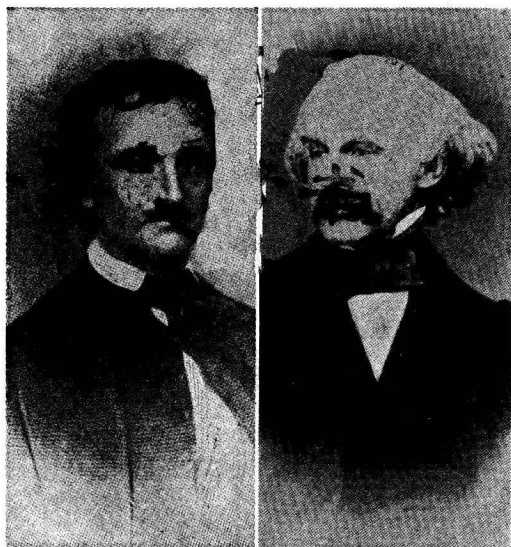
By N. Hawthorne

ボ才傑作集

著オポ・ンラア・アガドエ

緋文其字他

著ソーソーホルエニサナ



オポ ソーソーホ

新潮出版社

非賣品

世界文學全集(II)

才傑作品集
俳文字・其他

第二十三回配本

昭和四年一月五日印刷
昭和四年一月十五日發行

翻譯者

谷崎精二
福原麟太郎

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

長
八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

解 説

ボオに就いて

エドガ・アラン・ボオは千八百〇六年亞米利加のボストン市で生れた。両親は貧しい旅役者で、三人の子供があり、彼は二番目の息子だつた。幼にして両親を失ひ、彼はリッチモンド市の煙草商ジョン・アラン家に養はれる事になつた。少年時代養父母と共に英吉利に渡つて教育を受けたが、後亞米利加に歸り、ヴァージニア大學の學生となつた。だが彼は善良な學生でなく、賭博に耽つて多額の借財を生じ、家へ引戻されてしまつた。千八百二十七年身を軍籍に投じ、同三十年には士官學校に入學したが、結局彼は軍人で一生を送るに適した男でなく、間もなく學校を退いた。

その後彼は雜誌記者となつて諸種の作品を發表し、次第に文壇的地位を得るに至つた。千八百三十六年にはヴァージニア・クレムと云ふ十三歳の少女と結婚したが、飲酒の癖が次第に募つて健康を害し、轉々として職業と住所とを變へた。彼の若い、忠實な妻もやがて病床に親しむやうになり、千八百四十七年の初めに彼女は病死し、ボオはその前後に一二の婦人と戀に落ちて、懊惱と不如意との生活を送つた。

千八百四十九年の夏、彼はリッチモンド市に住む少年時代の戀人で、今は資産家の未亡人であるシェルトン夫人と婚約したが、この年の十月、バルティモア市の酒場で酒に浸り、人事不省に陥つて病院へ送られ、其處で息を引取つた。

○

文學を偏^{ひと}へに時代や環境の產物と見、或は一般民衆の訴へに代る聲と見なさうとする解釋乃至要求が、この頃の文

壇では強くなつた。最も適確に時代の精神を捉へた物、最も赤裸々に民衆の悩みを諷つた物——さうした作品に多くの價值が置かれるやうになつた。かうした傾向が當然であるかないかは茲で論ずる限りでないが、ボオの作品を讀んで、彼の著作が殆ど時代の傾向に没交渉であり、そして又決して一般民衆の悩みを代辯した物でないにも拘らず、私たちは強く心を牽^ひかれずにはゐられない事を知る。ボオは徹頭徹尾個人主義者だつた。彼は時代に無關心だつた。民衆を輕蔑さへした。(實際彼の時代の民衆の多くは、輕蔑に價するほど粗野で、痴愚だつた。)そしてひたすら彼自身の内なる要求に、美を求むる魂の喘ぎに、耳を傾けた。

實際ボオは社會はおろか、彼自身の生活さへありのまゝに描かうとしなかつた。「最上の作品は最高の想像より生まる。」これが作家としての彼の生涯の標語だつた。現代の作家だつたら、おそらくその實生活の記録をそのまゝ公けにする事によつて、彼の魂の喘ぎを直截に讀者に示したであらうが、ボオは數奇を極めたる生涯の經驗を決して作品の上で語らなかつた。その結果、彼の作品が誤解されたと同様に、彼の生活まで誤解された。彼は狂人、無賴漢、淫酒家とまで後人から罵られた。ボオの死後、彼の遺稿を編み、彼の傳記を書いたグリスウォルドは彼を評して「文學史上に記録されたる最もやくざなる人物の一人」とさへ酷評してゐる。

だがボオは彼の影響を多分に受けたと云はれる佛蘭西のデカダン派の詩人とは、聊か類を異にしてゐた。彼の生活は暗かつたが、彼の精神は寧ろ明るかつた。ボオの憂鬱をトルストイの憂鬱に比較してゐる批評家があるが、トルストイの憂鬱は彼の肉體——物質生活——が享樂し得た現世を、彼の精神が是認し得なかつたのが根本理由であり、これに反してボオの憂鬱は彼の精神が空想した美の世界を、彼の肉體が享樂し得なかつたのが原因である。ボオの實生活は修羅の巷であつたけれども、彼の精神に潜められた美の世界は朗らかで、光明に充ちてゐた。ボオドレールの説

く如く、「困難と戦ひ、劍の如き鋭さで對象に迫る彼の作中の男性はボオ自身であり、輝かしき、病める、そして凡ての聲が音樂の如き妙なる音色を帯びた彼の作中の女性も亦ボオ自身であつた。」

○

過誤と謬見に充ちたボオの傳記を基として、ボオを典型的なデカダンと解釋するのは最良の引倒しである事を説いてゐる批評家があるが、譯者もその意見に一理ある事を認める。文人にして古來悲慘な、窮迫した生活を送つた者は少くないが、彼等が凡てこの人生に望みを失つた者だとは云ひ難い。

ボオが飲酒狂であつたが故に、死期に近づいた頃の彼の生活が全く常軌を逸してゐたが故に、彼をデカダンだと斷定するのは早計である。ボオは多くの作品で人生と自然との例外を描いたけれども、そして又彼の作品の主人公は概して病的人物であつたけれども、彼の本來の精神は決して厭世的ではなかつたし、晩年の彼が人生に全く望みを失つたのでもなかつた。幾人かの女性に彼が戀した事も、彼が全く生活の目標を失つて自暴自棄になつたのではなくして、寧ろ彼が女性の純な愛情によつて泥沼のやうな生活からどうかして浮び上りたいと努めた證據だとも見られる。ボオがその愛人たちに與へた書翰が、さうした彼の心の働きを明かに示してゐる。一例として茲に彼がその愛人シユウ夫人に送つた書翰の一節を引用してみよう。

「私は幾月も前からこの事に氣が付いてゐた。あなたがあんなにも寛大に與へて下すつた凡ての幸福の後でかうなすべきなのだらうか？ 私が愛した凡ての者のやうに、あなたも私の暗い、失はれた魂から消えて行くのだらうか？ 私はあなたの手紙を繰返し、繰返し讀んだ。そしてあなたが自らそれを書いたのだとはどうしても思はれなかつた。（あなたが苦悶と悔恨無くてはゐられなかつた事を私は知つてゐる。）あなたの感化がもう私に及ばなくなると云ふ

事があり得べきだらうか。かうした優しい、眞實な人たちは常に死ぬまで忠實なのに、そしてあなたは死んでゐないで、美と生命とに充ちてゐるのに。ルイズ、あなたはあのふはくした白い上着を着てやつて来て、『エドガア、今日は。』と云つた。あなたがマツディー（ボオの義母）を探さうとして臺所の戸口を開けた時、あなたの忙しげな態度に、少し月並な冷たさがあつた。――あれが私にとつてあなたの最後の思ひ出だ。あなたの微笑には曾てあつたやうな愛と、希望と、勇氣との代りに、愛と、希望と、淋しさとがあつた。おゝ、ルイズ、いかに多くの悲しみがあなたの前にあるだらう。あなたの正直な、情深い性質は、虚偽な、無情な、世間に接して絶えず傷つけられるだらう。そして私はと云へば、眞實な、優しい、そして純潔な女性の愛が私を救つてくれない限り、私はもうおそろく一年と生きられまい。私の持つてゐる力が肉體的にも、精神的にも、どれだけ私をこの世に生かしてくれるか、數ヶ月たてばわかると思ふ。あなたが私に對して冷かになつた今、どうして私は神を信ずる事が出來よう。神と人生とに對する私の希望と信仰とを新たにしてくれたのはあなた自身ではなかつたか？ ルイズ、あなたが私を後に殘して見えなくなつた時のあなたの聲を私は聞いた。……だが私は尙もあなたの聲を聞かうとして耳を澄ませた。『マツディー！』とあなたが啜り泣きながら云つたのを私は聞いた。カタリナにあなたが挨拶してゐるのも聞いた。だがそれは唯思ひ出の種だつた。……例へ私の書いた物があなたの氣を悪くしたとしても、あなたは私の悔恨と悲哀とを知り、疑つてはならない。私の心は決してあなたに反かなかつた。……過去に於ける私に對するあなたの非利己的な心遣ひを思つて、私は悲しみに打勝つやうに努めよう。生きても死んでも、私は常に感謝と熱誠とを捧げるあなたの友人だ。」この書翰は當時もうすつかり健康を害して、屢々正氣を失ひ、醫者から直きに死ぬだらうとさへ診斷されたボオが、依然としてその純情と眞實とを失はないでゐた事を立證してゐる。

ボオの今一人の愛人だつたオスグッド夫人はボオの書翰を「神の如く美しい」とさへ呼んでゐるが、實生活の悩みを作品の中で洩らさうとしなかつたボオも、幾人かの彼の愛人に與へた書翰の中には、隠すところなく率直に彼の生活のありのまゝを語つて、哀切を極めてゐる個所がある。最後の愛人である閨秀詩人ホイットマン夫人に與へた、もう一つの書翰の一節を茲に掲げてみよう。

「私はあなたの手紙を繰返して唇に宛てた。歡びの、或は清き失望の涙で、濡らしながら。あなたの前でつい近頃『言葉の力』を誇つた私だが、今單なる言葉が私にとつて何の役に立つだらう。若し私が神に祈る事の効驗を信ずる事が出来たなら、私の生涯の最も緊急なるこの時期に於いて、私は跪いて私の誠心誠意をあなたに吐露し得る言葉を、あなたに私を示し得る言葉を、乞ひ求めるであらう。凡ての考へ、凡ての熱情が一つの壓倒的な望み——あなたを領かせ、如何なる人間の聲も語り得ない事をあなたに語りたいと云ふ唯一の願ひに、つまりあなたに對する私の愛情の云ひ難い熱誠さに溶け込んだ。……あなたは私の愛情の偉大さに對してだけでも私を愛するだらう。この冷たい、荒涼たる世の中で、愛されると云ふ事は意義のある事ではあるまいか。おゝ、若し私があなたの心に、アムダラインを引いたこの言葉(sermon)に私が籠める眞の意味を燒きつける事が出来さへしたなら！だが私の努力は無益で、私は應へもなく生き、そして死んで行くのだ。」

イングラムのボオの評傳の中には、ボオが幾人かの愛人に與へた多くの書翰が收めてあるが、それ等の中に見出されるボオの姿は、グリスウォールド等が傳へた彼とは餘りに異つた、純情な、誠實な、誰にも好意を以て迎へられるに違ひない詩人である。ボオがその愛人に示した純情と誠實とを、實生活の凡てに行き互らせなかつた事は彼の爲めに惜しむべきだと云はなければならない。彼が二重人格者だと云ふ推定を受けた理由もおそらく茲にある。

○

エドワード・トーマスはマーテルリンクの研究の中で、『ダンタザールの死』をボオの詩『アナベル・リイ』と比較し、兩者の運命觀に論及して、マーテルリンクの運命觀はボオのそれを一步も出てゐないと説いてゐるが、果してこの説は首肯すべきだらうか。ボオはエマスンが嫌ひだつた。エマスンの主張を神祕主義の爲めの神祕主義だと非難した。

エマスンの流れを掬んだマーテルリンクの神祕主義は、ボオの主張と多少肌合を異にしてゐると見ていふと思ふ。

『靈智と運命』の中でマーテルリンクは運命を外的運命、内的運命の二つに分ち、外的運命——即ち自己の外部に起つた事件を改廢する事は不可能だが、内的運命——即ち外的運命につれて自己の心内に起る變化、喜憂の情は、自己の意志でどうにでも作り直す事が出来る。若し人が欺かれたとしてもその欺かれたと云ふ事實は少しもその人の内的運命に關する事は無い。唯これを如何に宥すべきかと云ふ感情こそ、その感情の崇高、完全によつてこそ、人の運命は左右せらるゝと説いてゐる。

ボオの『ウィリアム・ウィルスン』は或る意味でボオの内生活の告白であり、同時に又彼の運命觀を鏡に足る作品である。同じ姓名、同じ容貌、同じ智力を持つた二人のウィリアム・ウィルスンが同じ學校で生立ち、本能的、惡魔的なウィルスンを、他の道德的、反省的なウィルスンが絶えず牽制し、妨害する。遂にその執拗な壓迫に堪へきれなくなつて、本能的なウィルスンが道德的なウィルスンを殺してしまふ。即ちボオはマーテルリンクのやうに運命を内的と外的とに分たなかつた。ボオの描いたウィリアム・ウィルスンにとつて、運命は直ちに自己であつた。運命と戦ふ事は自己と戦ふ事であつた。一生を通じてマーテルリンクの所謂不幸なる外的運命と戦はなければならなかつたボオは、「人生に於ける多くの幸福と不幸とは全く機會によつて醸し出されるが、我等心内の平和だけは決して、機會によつて左右されな

い。」と云ふやうなマールリントクの消極的、獨善的運命觀をおそらく一笑に附したであらう。ボオの全生涯は體質、境遇、さうした物に由來した不幸なる運命との勇敢なる連續的苦闘であつた。彼の魂が純眞であり、高貴であつたが故に、彼は一層勇敢に戦はなければならなかつた。そして彼の作品は時代の歴史でもなく、民衆の代辯でもなく、實にこの高貴なる魂の深い喘ぎであり、力強い羽搏きであつた。

「個人が如何に努力しても人生を幸福になし得ない。」ボオはかう叫んだ。だが彼の生涯と藝術とは、彼の如き悲痛窮迫の生活にあつても、人は尙ほ美と光明とを夢み得る事を私たちに教へてくれる。

○

探偵小説はボオの作品としては寧ろ第二義的な價值を持つた物かも知れないが、近代の科學的探偵小説の開祖として、私たちには興味が深い。あの精緻な推理と解釋とは凡庸な頭腦の作家の到底及びも寄らない處で、しかも世のありふれた探偵小説の如き淺薄と卑俗とに陷つてゐない。その微に入り、細を穿つた推理と論證の敘述には、やゝ難澁な個所が無いでもないが、讀者が熟讀玩味されたら、盡きざる興味が見出されると信ずる。

私が初めてボオの短篇集を譯して上梓したのは大正二年の七月だつた。ボオの詩、及び二三の短篇は早くから日本の文壇に斷片的に紹介されてゐたが、貧弱ながら一冊に纏めて彼の作品を出版した譯者として、私は最も早い者の一人ではないかと思つてゐる。その後十數年間にボオ短篇集は私の知つてゐる限りでも十冊近く出版されたやうだ。舊稿を訂正し、新しく譯した作品を加へてこの『世界文學全集』の中に加へるに際し、私は既刊の譯書を數種買ひ求めて讀んでみたが、中にはかなり無責任な翻譯もあるやうに思ふ。私の見た範圍では、吉田兩耳氏の譯本が殆ど唯一つ正確で、忠實で、好い參考になつた。(谷崎精二)

ホーソーンに就いて

今から二百年以上まへ、亞米利加マサチウセツツ州のセイレムといふ小さな町で、當時世間に喧ましかつた妖巫の術を行ふものゝ大檢舉があつて、妖婆と目星をつけられたものは法廷でひどく責められ、憐れな死様をしたものも多かつた。その時の裁判官の一人に、ジョン・ホーソーンといふ人がゐた。この人の玄孫がナサニエル・ホーソーンで、一八〇四年の七月四日に生れた。五歳の時、船長だつた父親が、世を去つた。母親はそれにひどく元氣を失つて、その後は一切世間へも出ず、四十年間といふもの、食事も子供達とは一緒にしないといふ程隠棲の生活をして暮したのであつた。

ホーソーンが九歳か十歳の時、その母親は、メイン州へ轉居してシペイゴウといふ湖の畔に住つた。これがホーソーンをして、かねて母親の血を受けてゐる以上に、孤獨を愛せしめるに至つた原因となつたものだといはれてゐる。『緋文字』の中でも、森の中の描寫のうまさ、木の葉や緑の日光や、小川や泉の寫生のうまさには、さういふ少年の頃の記憶が甦つてゐるかも知れない。十八歳の時にホーソーンは、ボウドン・コレッヂへ入學した。同級生に、後の詩人ロングフェローがゐた。又上級生にフランクリン・ピヤスがゐて、非常に親しくしてゐた。ピヤスは後に大統領になつた人である。

學校を卒業したのは一八二五年であつた。卒業すると又セイレムへ歸つて來たが、比較的豊かな家計を營んでゐたので、直ぐに職業を求むる必要もなかつた。それに、兼ねて文筆に携はらうといふ氣があつたので、その方面に入るべき機會を待つてゐた。當時亞米利加の文壇は誠に貧弱で、これぞといふ雜誌もなかつた。然し既に、アアヴィング

やクウバアは世間に名をなしてゐて、アアヴィングの『スケッチ・ブック』の如きは、非常に好評であつた。それらに刺戟されて、わが若きホーソーンは、試みに一つの物語を書いて、自費で出版してみた。然し、殆ど反響がなかつた。ほんの少ししか賣れなかつた。その物語には署名がしてなかつたけれども、それが失敗したので、彼は益々引つ込み思案になり、湖畔の母の家へ歸つて、益々生來の孤獨を愛する念を深めた。そして十年間も鳴かず飛ばずで暮した。然しその間、彼は絶えず讀書し、絶えず文章を書いてゐた。彼の將來の大成の基礎はこの時に培^{つちか}はれたのであると、文藝史家は傳へてゐる。

彼が書いてゐたのは皆短い物語であつた。長い小説も書いたが、大てい焼いて棄てゝしまつた。短い物語の方は、無名で又は變名で、新聞雜誌に掲げられることもあつた。そしてそのうちに、屢々批評家の賞讃を受けるやうになつて來た。それを集めたものが、一八三七年に出版された『トワイヌ・トウルド・テイルズ』である。これはわが國でも古くから教科書にされたりなどして多く讀まれてゐる。本篇の『緋文字』の末に附録として添へた短篇は、皆その『トワイヌ・トウルド・テイルズ』から取つたものである。尤も、一八三七年に出たといふのは、『第一集』であつて、『第二集』は一八四二年に、『第三集』にあたるものは『牧師館の古昔』と題して一八四六年に、『第四集』は『雪の似姿そのほか』と題して一八五七年に出版された。これらはいづれも現今、『トワイヌ・トウルド・テイルズ』として傳へられてゐるものであるけれども、嚴格に言へば第一集と第二集、もしくは第一、第二、第四集を以て『トワイヌ・トウルド・テイルズ』と稱すべきであると私は考へる。私の選んだのは『デイヴィッド・スウォン』『泉の幻』『ハイデガ博士の實驗』が第一集から、『人面の大岩』が第四集から、『知事屋敷傳説』が第二集から出てゐる。『トワイヌ・トウルド・テイルズ』とは「話し古るした物語」の意であつて、みな諸雜誌から再録したものであるから遠慮してつけた名であらう。

沙翁に用例もあるが、その用例「人生は話し古るされた物語の如く退屈なものだ」といふつもりではなく、むしろ退屈でない物語として書いたものに違ひない。中でも、最初の『デイヴィッド・スウォン』は最も人口に膾炙してゐる。わが國では古く森田思軒氏の譯があつて、國語教科書などにも收容されてゐた。『泉の幻』も同様に有名である。『ハイデガ博士の實驗』はそれを臺にして坪内博士が諷刺劇を書かれた事があつた。『人面の大岩』も日本の知識階級には極めて親しい物語の一つで、同じ亞米利加のもので言へば、アアヴィングの『リッパ・ヴァン・ウインクル』とか、ボオの『黒猫』などと同じ様によく知られてゐる。これらの短篇物語を通じて分ることは、ホーソーンは話を「作る」ことである。そしてその作られた話の中には、ホーソーン式な道德意識が濃く出てゐて、何か教訓があり、象徴があることである。例へば、『デイヴィッド・スウォン』では運命と神慮とについて彼自身の樂觀的な哲理を書き現はしてゐるし、『泉の幻』では神祕といふものの常識的な解釋がある。『ハイデガ博士』の話は青春と老年との心持の照應を明らかにする爲めの假構から生れて居り、『人面の大岩』では、あらゆるものが個性よりもむしろ象徴として用ゐられて世間的名聲といふものの價值、人の心の中にある雷同性などが嘲笑されてゐる。かういふのはホーソーンが最後まで失はなかつた特質で、それが既にこの頃から彼の作を特色づけてゐたものである。たゞ、『知事屋敷傳説』ばかりは、如上の物語とはすこし仕組みが變つてゐる。四つの物語はいづれもボストンの知事屋敷に残る傳説であつて、獨立戰爭の頃のエピソードが主になつてゐる。それをつなぐものが作者であつて、作者の見聞記といふわけのものである。北亞米利加獨立戰爭の際、ボストンは獨立軍の總將デヴォーチ・ウォシントンによつて包圍されてゐた。ボストンを占領してゐた大英國陸軍總督はハウであつた。市民の中には、英國王に忠誠をつくす心持のものと、ウォシントンに應じて獨立しようとするものとまじつてゐて、常に動搖してゐたらしい。『知事屋敷傳説』の第一の話は、かゝる危機に起つ

た物語である。これら四つの話は、ホーソーンが「亞米利加」の物語作者である點を現はす爲めに、特に附け加へて見た。

この一八三七年の短篇集第一も大して賣れはしなかつたが、これで彼は非常に有名になつた。もう無名の作家ではなくなつた。彼の友ロングフェローは大に之を賞讃して紹介したといふことである。著名な作家になつたホーソーンは雑誌の記者になつたり、一寸ボストンの税關に勤めたりしてゐたが、一八四二年に結婚してコンコルドへ家を持つた。その家は哲人エマソンの十年以前に住んでゐた家で、エマソンが『自然論』を書いた部屋が彼の書齋になつてゐた。

結婚の當初ホーソーンの家計は餘り豊かでなかつた。そこで友人達が心配して、彼の生れ故郷セイレムの税關吏の口を見つけてやつた。それは彼に適當な職業ではなかつたに相違ない。然し、三年間そこで辛抱した。そして免職になつた。免職になつて家へ歸つて妻君にその由を話すと、「では、あなた御本をお書きになると宜しいわ」と妻君が答へた。然し本を書いてゐる間はどうして暮すんだとホーソーンが反問した。するとこの山内一豐の妻は内緒で貯蓄して置いた金を出して彼に示したといふ事である。さうして出來たのが『緋文字』一卷で、すでに税關にゐた間から書きかけてはゐたが、出版された時は一八五〇年であつた。四十七歳にして始めて長篇小説を世に問うたのであつた。本書では『緋文字』の序文が譯出してない。この序文なるものは、英文學の學生でも餘程進んだ人々でなければ、その面白味が分らない位、澁くて退屈なものである。私は新潮社の當事者と相談の上之を省いたのであるが、研究社英文學叢書の『緋文字』などでも之はテキストの中に入れない。(英吉利のエッセイの澁味と、滋味とを愛する人は、原文でこれを味はれる事をおすゝめする。我慢して讀めば、かなりさういふ意味で趣のあるものである。)その序文に『緋文字』の由來が書いてある。彼は或る日そのセイレムの税關の屋根裏の部屋かなんかへ上つて、塵埃の山積してゐ

る古書類を閑に任せて調べてゐた。すると、羊皮紙の紙包の中に赤いAの字の形をした布にくるんだ一束の書き物があつた。その書き物の中に、昔検査官を勤めてゐたビュウといふ人の手記で、『緋文字』にあるやうな事實が書いてあつた、それを種にして綴つたのがこの話だといふのである。そしてホーソンはそのAの字の形をした緋文字を、何かの裝飾かしらと思つて胸につけてみた。するとそれは只の布ではなくて、何だか胸に焼けつくやうな氣がした、なごゝ書いてゐる。もとよりこの由來話も虚構であるらしい。然し兎に角ホーソンは、今までの「作り話」らしいものを止めて、十七世紀の新英蘭ニュー・イングランドに事實あつたらしい話を書いたのである。その本は五千部刷つて忽ちに賣れた。そして恐らく當時第一の名作として迎へられたのであつた。

これは所謂三角關係の物語である。たゞの三角關係の物語は大して珍らしいものではない。然しホーソンのこの三角關係の物語には後ろに十七世紀の新植民地の清教徒の嚴格な社會があり、主人公ヘスタ・プリンは特別に強い性格を持つて居り、相手のデイズデイルは牧師であつて、ボストンの町の風教と信仰とを取締る天職にある人であり、醫師チリグウッスは蛇のやうに執念深い復讐の幽靈である。さういふ制限が色々あつて、この三角關係は、世間と個人の名譽との争ひ、意志と感情との争ひ、信仰と思想との争ひを描くやうになつてゐる。そこで、只でさへ心理を寫すことに走りやすい、この種の小説が、益々心理描寫を必要とするやうになり、作者もその點に最も力を注いで、『緋文字』は遂に世界的重要な心理小説の典型といふことになつてしまつたのである。それにこの作者は、例の神秘象徵好み教訓好みから、篇中到處にロマンティックな形象が散在して、一々道德的註釋までついて居り、『緋文字』一巻は、世間と名譽と信仰とについての隨筆だと言へるかも知れない。

然しこの小説を一九二八年の今日讀み直して最も注意すべきは、その心理描寫や、象徵や神秘や教訓よりも、むしろ

る、主人公ヘスタ・プリンの心の生活ではないであらうか。彼女が緋文字によつて社會と絶たれて、市の郊外に住むやうになつてから、彼女の精神は、清教徒の凝り固まつたそれまでの信仰に對して之を批評的に見る餘裕を與へられ、彼女自身の神學、彼女自身の道德觀社會觀を作るに至り、自ら信ずるところは、權威の前に曲げない意志の力と呼び起すに及んで、全く新しい自由思想家が出現したのであつた。かゝる智的な、意志のつよい、自由な性格は當時の社會でなく、今の世間にも存在しうるものである。批評家によると、ヘスタ・プリンの性格は假空的であつて實在を疑ふとも言つてゐるのがあるけれども、私はさうは思はない。『緋文字』はヘスタ・プリンの性格と生活によつて生きうると思ふものである。

『緋文字』に成功したホーソーンは、次で一八五一年『七破風の家』を書いた。これは『緋文字』よりも、もつと快活で速度が早く、一層面白くもあつた。今も尚ほ相並んで彼の傑作に數へられてゐるのである。

『七破風の家』の出た次の年に彼は又子供の爲めの物語を出版した。それが『トワイヌ・トゥルド・テイルズ』と共に我等の國に於てもよく讀まれてゐる『奇異物語』(ワンダ・ブック)である。希臘神話の極めてポピュラなものを、極く分りやすく書いたこの本は、今も尚、少年少女の愛讀書になつてゐる。これにも『第二集』が出來た。『ダングルウッド・テイルズ』と呼ばれてゐるものがそれで、一八五三年の出版になつてゐる。

ホーソーンが子供の爲めに書いた書物はこれらに限らない。わが國でやはり喧傳せられ、彼の作中では一番有名であるかも知れないところの『傳記物語』(バイオグラフィカル・ストーリーズ)も早く一八四二年に書かれてゐる。そればかりか、今日三十四五歳以上の人で日本の中學教育を受けた人なら、誰でも一度はその頁を讀んだことがあるであらうと思はれる『パアレエの萬國史』なるものは、——この萬國史が日本の文化のうちに「世界」を知る知識に貢獻した

ところは偉大なものである——彼が未だ文名をなさず、やうやく雑誌に寄稿してゐた頃の著述であつて、即ち一八三七年、『トワイヌ・トウルド・テイルズ』第一集と同時にボストンから二冊本として刊行されたものであつた。その他子供のための本として『お祖父さんの椅子』といふ亞米利加歴史物語もある。

『七破風の家』の次の年には大人の爲めの物語も亦出版された。『ブライズデイル・ロマンス』といはれてゐるものがそれである。この年即ち一八五二年、彼は再びコンコルドへ歸つて來た。そして今度は家を買つてそれに住んだ。この家にも因縁があつた。即ち、この頃日本でも譯本のある『少女』（リットル・ウイメン）の作者オールcottの父のものであつたのである。この家がホーソーンの臨終の家になつた。

その頃、昔ボウドン・コレヂで親友であつたフランクリン・ピヤスが大統領の選舉に候補として立つた。今は文界に於ける大統領にも等しいホーソーンは彼の爲めにその傳記を書いてやつて之を聲援した。ピヤスが首尾よく當選するとホーソーンは彼から依頼されて、英國リヴァプールの領事になつた。滯英四年、その後佛、伊等の國々を巡遊して一八五九年又英國へ歸つて來た。その旅で羅馬に長く滞在してゐて材料を蒐めて綴つた物語が一八六〇年の『マアブル・フォオン』であつた。その年彼は任滿ちて亞米利加のわが家へ歸つて來た。

そして一八六四年五月十八日その家で死んだ。その遺骸は、アーヴィングの物語で有名な「スリイビ・ホロウ」に埋められた。六十一歳であつた。

x

x

x

今度私がこの全集に加はることになつたについて、いろいろの事で、加藤武雄氏の御好意おうかに與つた。記して感謝の意を表する。（福原麟太郎）